

説教 『 自分の十字架を背負い、我に従え 』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 16章21節～28節

21 このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。22 すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」23 イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」24 それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。25 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。27 人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。28 はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

これから、マタイ福音書を通して、伝道にたずさわる弟子たちの訓練について学ぶ前に、まず、旧約の対応箇所として読まれた詩編49:6-13について解説しましょう。

マタイ福音書16:26に「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか」とあります。ここで、主イエスは、人間が如何に「全世界を手に入れる」ことにこだわるか、熱心になるか、ということを見抜いておられます。

「全世界」と言わないまでも、この世の多くの人は、私中心の、私の居心地いごこちの良い世界を求めています。また、人は「私中心」を、今の世界のみならず、未来にまで拡張しようと企たくらみます。

詩編49:11——

人が見ることは
知恵ある者も死に
無知な者、愚かな者と共に滅び
財宝を他人に遺さねばならないということ。

ここに、はっきりと「他人に」と書いてあります。何という皮肉、何というユーモアなのでしょうか。

人生の中で、子どもや孫や曾孫^{ひまご}が与えられるのは、まことに幸いなことです。しかし、私中心の世界観において、彼らを支配してはなりません。なぜなら、詩編詩人の卓見によれば、子どもや孫は「他人」だからです。自分は子孫たちに多くの財宝・遺産を譲り渡すから、「私の願い通りに、お前たちは幸福になってくれ」というわけには行かないのです。

まず、「自分を捨てる」(マタイ16:24)、つまり、私中心の世界観を捨てる時、神が一人ひとりの人間を憐れんでくださいます(マタイ5:7、15:22)。神が自分を憐れんでいてくださるという立つべき位置に立つ、あるいは立ち帰るとするのが、初めの私の一歩、主イエスの弟子の一歩です。それが、「他人」の上に立つ「自分を捨て」、神の下に自分の真の「命を得る」者の道です。

四福音書の中で、マタイ福音書の特徴は、弟子たちの不信仰や無能力をえぐり出しつつ、そうした弟子たちを……つまり、いわゆる立派な弟子ではなく……中心に、どのように教会(16:18、18:17)が形成されていくか、を映し出している点にあると言われています。

主イエスは弟子たちについて、「信仰の薄い者たちよ」(マタイ6:30、16:8)と言明されています。しかしそれは、「だから、お前たちはだめだ。伝道の最前線には、他の人たちに立ってもらおうがよい」という意味ではないでしょう。「そうした弟子たち」だからこそ、主イエスが教えられる言葉に耳を傾けなさい、というのが、マタイ福音書が描き出そうとしている主イエスと弟子たちの信従関係です。

今回の短い聖書箇所の中に2回、主イエスは「弟子たちに打ち明け始められた」(16:21)及び「弟子たちに言われた」(16:24)と記されています。果たして、ペトロははじめ弟子たちは、主イエスの明確な言葉による弟子訓練を、正しく受け止めることができたのでしょうか。

今日の教会は、そのような弟子訓練を受けた者を必要としています。弟子たちは、山上の説教をはじめとする御言葉と、主が「取って、感謝して、裂いて、与えた」パンと魚の奇跡(マタイ14:13-21、15:32-39)などによって、主イエスにより鍛えられました。弟子たちの間に、主に対する無理解があり、また仲違い^{なかたが}(参照：マタイ16:28、20:20-24、ヨハネ21:20-23)があったにもかかわらず、主イエスは忍耐強く彼らを導かれました。まさに私たちがまた、主日の礼拝において、御言葉と聖餐にあずかることによって、主に遣わされる者の務めをしっかりと受け止めたいと願います。

今回の聖書箇所に、弟子の筆頭格、ペトロが主イエスを「いさめ始めた」(16:22)とあ

りますが、これは端的に人間の「勘違い」をえぐり出しています。自分が先生づらを演じているのですから、訓練を受ける姿勢から程遠いものがあります。先生づらを演じるペトロの勘違いは、^{おご}驕りやすい私の勘違いでもあります。

先に、「弟子訓練」のことを、「主に遣わされる者の務め」と言い換えました。すでに日本語・キリスト教用語として流布していますが、英語では、それを Mission / ミッションと言います。さらに言えば、教会で弟子訓練を受けた人たちが遣わされるのが、「伝道」です。

2014年度、茅ヶ崎香川教会の部会、エマオの会では ‘ Passion, Mission, Action ’ を目標に掲げています。エールを送るわけではありませんが、その句を援用しながら説教することにしましょう。

マタイ福音書16:21-28では、「主に遣わされる者の務め」が説き明かされ、ミッション「伝道」の何たるかが教えられています。その上、感謝すべきことに、^{さんぶくつい}三幅対（三つで一組のもの）のように、①パッションと③アクションとの前後関係において、②ミッション「伝道」の真意が照らし出されています。

これから御言葉に従って正確に捉えますが、一応、パッション「苦しみ / 受難」とアクション「活動 / 働き」と和訳しておきましょう。

① 〈パッション〉について

マタイ福音書16:21――

このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。

これは、主イエスによる受難予告の第1回目に当たります（2回目 17:22-23、3回目 20:17-19）。文脈上で注目すべきことは、この受難予告が、「あなたはメシア、生ける神の子です」（16:16）というペトロの信仰告白の直後に置かれていることです。

主イエスと弟子の代表ペトロとの呼びかけと応答の中で、主題である「イエスを誰とするか」が私たちの眼前で展開されています。つまり、弟子訓練の第一として「イエスを誰とするか」という課題が挙げられているのです。

前回のマタイ福音書16:13-20の説教で、ペトロの「メシアの告白」は完璧な信仰告白であると述べました。

その告白の言葉には、主イエス・キリストの十字架と復活が含意されています。すなわち、「メシア」及び「キリスト」の語義は、「油注がれた者」であり、その意味するとこ

ろは「救い主」です。従って、神は救う者、そして私たちは救われる者、という関係が成り立ちます。そして、何によって神は私たちを救われるかと言えば、主イエス・キリストの十字架と復活です。

一口で言えば、イエスをメシア「救い主」と信じることは、主の十字架と復活による救いを信じることにほかならないのです。

それならば、なぜ、主イエスは、弟子の正統な信仰告白の直後に、受難予告をなされたのでしょうか？

それは、「イエスを誰とするか」に関わる神の御言葉と人の傾聴・応答が、信仰の中心であり、教会論や伝道論の基礎であるからです。

私たちの心は、かたくなであり、また自分に都合のよい勘違いに陥りやすいものです。受難予告が三度も繰り返された通り、常に私たちは聖霊の力によって打ち砕かれ、へりくだらねばなりません。

ここでは主イエス自ら、ペトロが悪魔につけ込まれないように、主の受難と復活について教えてくださいました。〈ミッション〉の先頭に立つペトロに、〈パッション〉が示されたのです。

主イエスが打ち明けられた通り、パッションとは、神の御子が「十字架の苦難を受け」ということです。付け加えて言えば、パッション（ギリシャ語：パスコー）の原義は単に「受ける」であることは意味深長です。マタイ福音書16:21の新共同訳では「苦しみを受けて」の部分「パスコー」です。

つまり、主イエスが人類の罪を担って、苦難を「受けた」十字架の御業によって、私たちは無償で永遠の命を「受けた」のです。私たちが、主の十字架を信じ、自分の十字架〈パッション〉を背負って（マタイ16:24）、〈ミッション〉に遣わされたときにも、私たちに、永遠の命を「受けた」という喜びによって熱情が絶えることはありません。

③ 〈アクション〉について

マタイ福音書16:24――

それから、（イエスは）弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

主イエスの受難予告に引き続く、主イエスから弟子たちへの語りかけです。ここでは、弟子たちを率先する主イエスの言葉に基づき、〈パッション〉から〈アクション〉へという流れをつかみ取りたいと思います。

神の伝道〈ミッション〉に特徴的なのは、「受けた」者を「与える」者へと転じさせる

勢いの盛んなことです。ひたすらに聖霊の力により頼む伝道〈ミッション〉は、弟子たちを〈パッション〉から〈アクション〉へと駆り立てます。

教会とこの世において、教会の指導者や信徒たちの展開する奉仕活動〈アクション〉が多様であり、自由自在であることは、聖書が伝えている通りです。ここでは、そのように、ある面では多様な〈アクション〉を貫いている主イエスの教えの根本を捉えることにしましょう。

ここで主イエスは弟子たちに、「自分の重荷を背負って」ではなく、「自分の十字架を背負って」と語られています。

「自分の十字架」、すなわち、「私の十字架」は、「主イエス・キリストの十字架」とは全く異なります。「私の十字架」は、罪の代価を支払う力も、神と人を愛し抜く力も持ち合わせていません。それこそ、唯一、「主イエス・キリストの十字架」が私たち、悔い改める者にもたらすものです。

それなら、何故に「自分の十字架」なのでしょう？ 一般的な「重荷」では、いけないのでしょうか？

主イエスが「自分の十字架を背負って」とおっしゃられた、その真意は、主の十字架〈パッション〉に立ち帰って顧みるべきです。

主の十字架〈パッション〉とは、罪のない清らかなキリストご自身（Ⅰヨハネ3:5）のためのもではありません。それは、罪の汚れに染まった他人・全人類を救い出す神の大いなる御業でした（テトス2:14）。私たちが、罪と死という人間の重荷から解放されたのは、主の十字架によって、でした。まさしく私たちに代わって、主イエスが神の怒りを「受けた」のです。

私たちは、主の十字架のもとに新しく生き返らされて、天の国を目指し、この世を歩む者、〈教会〉に集う者となりました。以前は、指一本たりよその人の重荷のために差し出せるような者……少なくともその務めを全うできる者……ではありませんでした。しかし今、私たちは主イエスの赦しと導きのもとに、主に従い、主について行く者（マタイ16:24）とならせていただきました。

自分の重荷であれ、他人の重荷であれ、主の十字架の力による以外に、それを担いきる術は^{すべ}ありません。主の十字架は、罪赦された私たちの心を……十字架上の主がそうであったように（ルカ23:34,43、ヨハネ19:26-27）……隣人に向けさせます。私たちは、主の十字架から世界と人を見渡すよう招かれています。

①と③との中心②〈ミッション〉についてのまとめ

礼拝中心の生活を送り、主の十字架のもとにたたずむ敬虔な人の〈アクション〉は、一

見〈アクション〉でないように受け取られるかもしれませんが。しかし、それが、神の計画のうちに〈アクション〉を為す者の正しい立場です。そこから出発する時、カルバリの丘から旅立つ時、私たちはしっかりと「私の十字架」を担い、また、「自分の十字架」を担っている隣人と軛くびきを共にして（ガラテヤ6:2）、道を行くことができるでしょう。

マタイ福音書11:29-30 主イエスの言葉——

²⁹「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。³⁰ わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

「自分の十字架」を担う隣人、また、これから主の十字架のもとに招かれようとしている人は、一様ではありません。隣人や新来者と軛を共にする、その〈かたち〉、すなわち、神からの愛と知恵に根差した〈アクション〉は、私たちの出会った人と機会にふさわしく現されることでしょう。

常に私たちが、礼拝において主イエス・キリストの〈パッション〉に立ち帰り、今、何を為すか、主の喜ばれる〈アクション〉を問い続ける中で、私たちの伝道〈ミッション〉は成熟させられていくことでしょう。

「自分の十字架を背負い、我に従え」——御心が成るように、主によって私たちの力を合わせ、十字架を再建するという実践に取り組みたいと願います。